**第二十六回関西現代演劇俳優賞**

現代演技論研究会

２０２４/０３/０４

関西現代演劇俳優賞は

現代演技論研究会の主催事業です

関西の演劇界は魅力的な俳優を輩出しておりますが、俳優に対する賞は少ないと思われます。充実してきた戯曲賞同様、俳優賞の必要性を感じ、１９９８年に現代演技論研究会(同年発足)のメイン事業として、関西現代演劇俳優賞を設立いたしました。

演劇評論家の主催・出資する賞であり、表現者を選考するという行為は僭越ではございますが、継続的に行い、関西演劇界の活性化につなげることができれば幸いです。

尚、２００３年より、選考委員は太田耕人と九鬼葉子となっております。

また、２０２０年より、「男優賞」「女優賞」を「大賞」と改めました。

現代演技論研究会について

現代演劇の表現は多様化しており、演技についても実に様々な表現方法が見られます。しかし、演劇評論家は劇作や演出を評する言葉は持っていても、演技については曖昧な印象批評にとどまり、明確な言葉による表現を獲得していないように思われます。

このような状況を打破するため、三人の関西在住の劇評家、菊川徳之助(元近畿大学舞 台芸術専攻教授、国際演劇評論家協会名誉会員)、太田耕人(京都教育大学学長)、九鬼葉 子(大阪芸術大学短期大学部メディア・芸術学科教授)によって現代演技論研究会を１９９８年に発足いたしました。

特定の演技システムに統一されることなく発展した日本の現代演劇。その独特の演技方法を具体的な言葉で表現することを目指しております。

**現代演技論研究会**

菊川徳之助

太田耕人

九鬼葉子

片山加菜

第二十六回関西現代演劇俳優賞受賞者

**大 賞**(五十音順)

金子 順子 　 （コズミックシアター）

髙安 美帆　 （エイチエムピー・シアターカンパニー）

原 竹志　 （兵庫県立ピッコロ劇団）

**奨励賞**

荷車 ケンシロウ　　 (劇団不労社)

**関西現代演劇俳優賞要項**

１.対象

一年間(１月～１２月)に行われた関西の劇団、及びプロデュース公演に出演された関西の俳優を対象として、年間ベストアクター、アクトレスを選出する。

２.受賞人数および正賞・副賞

大　賞　　　　　　１〜２人　　正賞：賞状　　副賞：５万円

奨励賞　　　　　　１人　　　　正賞：賞状　　副賞：３万円

\*この人数は柔軟に対応したいと思います。

奨励賞は成長著しい若手を対象にした賞です。

３.選考委員

太田 耕人　　九鬼 葉子

４.選考会

年１回ないし２回

５.授賞式

毎年２月～３月

選 評

大賞 （五十音順）

**金子 順子(コズミックシアター)**

**「マリヤの賛歌―石の叫び」(マリヤの賛歌を上演する会)　私 役**

九鬼： 慰安婦体験を綴った城田すず子さんの手記を原案にした、くるみざわしんさんの戯曲。岩崎正裕さんが演出した。戦時性暴力という真摯な主題に渾身の演技で向き合った。

「私」が自室で城田すず子さんの自伝「マリヤの賛歌」を読み始める。「私」は彼女の心を想像し、その半生を演じ始める。家の借金のため、１７歳で芸者屋に。学生に淡い恋心を抱くが、水揚げの相手に淋病をうつされ、遊郭に住み替えとなる。祖母が彼女を家に寄せ付けず、実家とも疎遠になり、台湾の遊郭へ。さらに外地の慰安所を転々とする

相当な演技力が必要な戯曲。まず、その構造。「私」とは、問題から目を逸らしてきた現代女性、言わば私達の象徴である。「何かの都合」で、安全圏で生きる純真な女と、性暴力を受ける女に女性達が二分される不条理。女である自分までも、差別意識に毒されていた、と内省する。すず子さんに憑依したように演じたかと思うと、それを見詰める「私」に瞬時に戻る。当事者だけではなく、恋した男性など、彼女の関わった様々な人物も演じ分ける。短い台詞の人物も合わせると、私が数えただけで２５役はあった。どの人物も、ありありと観る者の前に、その姿が立ち上がる。また、すず子さん自身も、年齢や状況によって、変化する。甘い物が大好きだった、無垢で無邪気な少女時代。苦界に身を沈めてからも、様々な顔を見せる。生きる気力も失った時の、自らの体重を支えるのも億劫な様子。進駐軍を相手にする時は、荒み切った心のはけ口にするかのような、妙なハイテンション。そして、初恋の人に似た学生さんが客になった時は、純粋な気持ちが蘇り、体つきまで格好よくなる。互いに一目ぼれするのが納得できた。その運命の人とようやく出会えたのもつかの間、交際を反対され、無理心中を図るが、彼女だけが生き残ってしまった。

すさんだ心に灯をともしたのが、婦人保護施設「かにた婦人の村」(千葉県)への入所。厳しい境遇の女性達とともに、自活の道を探し、慰安婦の鎮魂碑を作ることに邁進する。後年、ラジオで自らの体験を語る時は、親しみやすい下町のご婦人の口調になり、本来は、どこにでもいる、ごく普通の人生を歩むはずだった女性であることに、改めて気づかされ、切なくなった。

２０２２年の年末に初演後、早くも２０２３年７月から再演。１２月まで月１回のロングランを敢行した。初演とは、演じ方も変え、さらに進化していた。

よほどの技術と精神力、社会の矛盾に対峙する強い意志がなければできない作品。金子順子さんにしかできない演技。関西から世界に向けて発信したい舞台だ。

太田：金子順子さんの『マリヤの賛歌―石の叫び』は、一人芝居である。演劇の基本

は対話（ダイアローグ）だが、一人で対話はできない。そこで一人芝居では、通例、いくつかの手法が使われる――相手が傍らにいるかのように台詞を言う、一人で複数の登場人物に扮して対話を再現する、観客に向けて語りかける等。しかし、この劇はそうではない。

ただ一人の登場人物である「私」が、元日本人慰安婦・城田すず子さんの自伝『マリヤの賛歌』を自室で読む。それだけである。ふつうに考えれば、朗読劇になってしまいそうだ。ところが、「私」が本を手にし、声に出して「読む」と、そこに「宇宙」が生まれ、ドラマが展開する。

「読む」というのは、じつは適切ではない。たしかに劇冒頭、金子さんは本を開き、そのページに視線を落とす。活字を追って読んでいるように見える。しかし、観客はそれが「朗読」などではないことをすぐに了解する。記憶され肉体化された一つひとつの言葉が「私」の身体のなかから発せられていることを感じるから。それらの言葉は、城田さんと一体となった「私」の切実な声となり、最後には城田さんも「私」も金子さんも包摂する「女性一般」の声となって響きはじめる。

城田さんは戦後の慰安婦差別に負けることなく、けっして人生を諦めない。彼女の人生は男主体の世間の価値観に押し潰された人生である。だが、彼女は恨み言を言わない。金子さんはその前向きの姿勢を、不自然になることなく表現した。下町のパン屋で育った幼年期、遊郭に身を置いた青年期の逸話も、徒に子どもらしさや娘らしさを強調することはしない。それでいて劇が成り立つ。描かれる素材の強靱さもさりながら、これは俳優の力量であろう。

戯曲を見ると、恐ろしいほど長い台詞が次から次へと現れる。もはやベタ打ちされた活字の黒々とした海である。これを見たら怖じ気づいて、とても演じる気にならないのではないか。むろん、劇作家は上演不可能などとは考えず、これが最善のテクストだと信じて執筆している。金子さんはあらゆる演技の抽斗を開け、神業のようにそこから劇を立ち上げた。

「生理的にこの台詞は言えません」と、稽古場で主張した俳優を何人も知っている。仕方なく演出家は台詞を修正する。ところが、同一の戯曲が別の機会に上演され、その台詞が戯曲通りに発せられるのを聞くと、何の不自然さもない。むしろ、登場人物の気持ちにふくらみが出たり、文脈のなかで台詞が生きたりする場合が多い。自分の生理を台詞の生理にあわせ、台詞の効果をあげるのが最も優れた俳優ではないか（その台詞がほんとうにポンコツの場合は別です）。金子さんがみせてくれた圧巻の演技は、まさに「最も優れた」俳優のそれだった。

**髙安 美帆（エイチエムピー・シアターカンパニー）**

**「リチャード三世　馬とホモサケル」（エイチエムピー・シアターカンパニー）**

**リチャード三世 役**

太田： シェイクスピアの原作では、野心に駆られたリチャードが、次々と兄弟を暗殺し、敵側の未亡人を娶り、王位に上り詰める。彼に良心の痛みはなく、自分の策略がうまく働いたことへの満足と、出世の喜びが彼を充たしている。魅力的な悪役だが、シェイクスピアの筆がその内面を描くことはほとんどない。

作者のくるみざわしんさんは、リチャードが肉親を殺してまで、王になってゆく、その動機を描いた。冒頭、リチャードはヨーク家のためランカスター家と闘い、華々しい戦果を挙げて帰陣するが、彼を出迎える者は誰もいない。母にも兄たちにも愛されていないことを彼は知る。それからのリチャードの兄殺しの連続は、復讐というよりも、自己を肯定するため、いわば自己承認欲求から起こされた行いなのである。

主役リチャードを演じた高安美帆さんは、小柄な女優である。そのことによって、猛々しい男の野心の達成、という側面がすっかり消えた。リチャードの行動が、自らの価値を確認し、虚しい自己を充たすためのものであることが窺えた。

シェイクスピアの台詞を短く刈り込んだとはいえ、じつに見事な台詞回しだった。快いスピードとリズムが卓抜で、観客の気持ちをみるみる巻き込んでいく。リチャードは自分の立てた戦略が面白いようにはまり、面白くて仕方がない。王位を得るよりも、むしろ戦略の成功に夢中になっていく。速度のある展開のなかで、その様子がリズミカルな台詞と、躍動する身体から伝わってくる。この弾むような身体性も、受賞の大きな理由となった。

シェイクスピアの台詞を活かしながら、意味をずらしたり、すりかえたりする手法も採られた。たとえば、この劇で最も有名なリチャードの台詞は幕切れの「馬だ、馬をくれ。国なんかくれてやる」だろう。シェイクスピアでは、足が不自由なリチャードが、敗色濃い戦場から退却するため、軍馬をもとめて叫ぶ。一方、この劇のリチャードは、くる病でも足が不自由でもない。幼いとき、とても優しい子どもで、一匹の馬を可愛がっていた。結末で彼が叫ぶ「馬だ、馬をくれ。国なんかくれてやる」は、その馬を、純粋無垢だった幼年期の幸せを、返してほしいという叫びなのだ。自己の価値を確かめるために家族を殺害していったリチャードの物語は、この最後の台詞でその円環を閉じる。高安さんのリチャードにはどこか少年の面影が宿っていて、この結末が深い印象を刻んだ。

九鬼： 戦の神に身を捧げるため、出征前に葬式を挙げられたリチャード。軍功を挙げて帰還した彼を誰も出迎えず、父は彼に、死んだまま生きて戦を続けよと命じる。父(=父権制の象徴)によって永遠に戦うことを運命づけられた彼に、残忍な心が芽生えていく。髙安さんの造形したリチャードは、どんなに残忍さが増しても、どこか父に認められたい、という切ない少年性を秘めていた。だからこそ、最後に女性達の力で戦の呪いから解かれ、少年の無垢な表情に戻るという改作に説得力を与えた。

見事な口跡。膨大な台詞量だが、リズムが一糸乱れない。そして俊敏な身体性。人を口八丁手八丁でたぶらかす時は、道化のような身のこなしになる。

そして、ラストに「馬をくれ！馬を」と叫ぶ。子供の頃、馬で野原を駆け抜けた記憶が蘇ったものだ。朝日に向けて大きく手を広げる。原作では、馬は戦の道具を表すが、今回は正反対の意味、つまり、無垢な希望を表した。

長時間の芝居で膨大に語り、動き、身体表現をし、最後の最後に、最も大きなエネルギーを発する、この場面が残されていた。それを見事にやり遂げた演技に、舌を巻いた。イギリスで上演してはどうか？大変なことを簡単に勧められるものではないが、恐らくこの演技は、話題になる。

**原 竹志（兵庫県立ピッコロ劇団）**

**「やわらかい服を着て」（兵庫県立ピッコロ劇団）　夏原一平 役**

九鬼： 原竹志さんは、関係性を構築する演技が非常に巧みである。これまでの選考会でも、他の俳優が受賞される時「相手役の原さんとのコンビネーションがよかった」など、よくお名前が出ていた。俳優として、とても素敵なことだと思う。

今回の一平は、はまり役だった。はまり役と思わせる説得力のある演技だった。大手商社の社員という、エリートの知性と品の良さを孕んで登場され、理想を追う、正義感溢れるNGOのリーダーのオーラを醸し出された。理想を追うあまり、職まで失う。戦争で儲けようとする会社を辞める決心をするところまではかっこいいのだが、収入が激減し、それでもメンバーが難民キャンプに行くお金まで出して、ついに水道まで止められ、事務所の流しで行水するまでになる。みじめな姿とも言えるが、底辺に落ちてからの彼には、なんとも愛嬌がある。他者に対する気持ちが純粋で、それゆえ喜劇性も帯びる。メンバーの一人の新子と心が通じ合い、つきあいが始まると期待したのに、新子から距離をあけられ、恨み言を言うところが、なんとも滑稽でかわいらしい。人間味あふれる造形。一人の人間のいろんな顔を演じ分け、それらがすべてつながり、生き生きと魅力的な男性像が立ち上がった。二枚目と三枚目を、こんなにも自然に行ったり来たりできる俳優は珍しいのではないか。

太田： 他の作品もそうだが、今年は本業の多忙さや、体調不良でかなり多くの舞台を見逃した。原さんが出演するこの舞台も見られなかった。だが、原さんの他の舞台は幾度となく拝見し、2006年初演の本作のことも存じている。今回のピッコロ劇団による上演に関して、九鬼さんの考えを聞くうち、自分が以前から原さんの柔軟さに着目してきたことを改めて思い出した。とくに相手役との演技の間合い、台詞の息の合わせ方は一流である。彼の演じた一平役なら、さぞかし素晴らしかっただろうという思いが募った。

 　この国の俳優は、どんな役を演じても、その人らしい個性を出すことが求められがちである。かつて、それは主演俳優の証しであった（たとえば、森繁久彌さんを思い起こすとよく分かる）。だが、そもそも俳優はさまざまな人物になるのが仕事である。その時々で別人にみえるほうが本当ではないか。また、固定した役柄もとうに時代遅れである。人間には二枚目も三枚目も、悪人も善人もない。誰もが滑稽さや無様さを、悪心や善良さを持っているはずである。

 　そうした演劇観を持つ私は、以前から原さんに注目していた。舞台を見逃した不徳をお詫びしつつ、その俳優としての特質がよく表れた作品で受賞されたことを祝い、心から慶びたい。

大賞選考　（五十音順）

**石丸 奈菜美(MONO)　「なるべく派手な服を着る」(MONO)　家永真知子 役**

太田： 久里家の息子たちは六人兄弟で、上の四人はなんと四つ子である。独り住まいの父が重篤になり、全員が実家にもどってくる。母は早くに亡くなっている。兄弟の記憶のなかで、母は聖母のように優しかった。

一緒に暮らす女性をともない、帰って来た者もいる。石丸奈菜美さん演じる家永真知子は、次男・悟の内縁の妻。男性たちの前では、滑稽なほど丁寧な言葉遣い（おかしな敬語も使う）で、夫を立てる淑やかな女性としてふるまう。しかし、女だけになると、どうも性格が激変するらしい。コメディエンヌの本領をみせ、石丸さんがこのキャラを見事に作りあげた。

 　劇は終盤、驚愕の展開をみせる。母はじつは放埒な女性で、危篤の父は養父にすぎず、六人兄弟の実の父親はみな違っていることが知れる。それに加えて、従順と思われていた真知子が、他の兄弟とも情を通じていたことが分かる。

 　真知子の奔放さに、呆気にとられる兄弟たち。舞台奥に立つ真知子に照明が当たる。そこで彼女が浮かべる微笑みは、慈愛にあふれる母のそれであり、同時に妖艶な女のそれでもある。《聖女／娼婦》という両極性を、石丸さんは一種のタブローとして幻想的に提示した。それは亡き母の似姿でもあるのだろう。

**大熊 ねこ(遊劇体)** **「灯灯ふらふら」(遊劇体) トヨコ 役**

太田：主人公のタカシは、生まれ育った町で建築事務所を起こし、今では老人になっている。老いたタカシが椅子に座り、子ども時代からのさまざまをとりとめもなく回想すると、それが再現されて舞台で演じられる（しごく緩い構成だが、一つひとつの出来事に味があり、なんともいえぬ懐かしさが漂う）。

大熊ねこさんは、病弱で18歳で世を去る、元名主の娘トヨコを演じた。どちらかといえば、どっしりとした存在感のある女優である。その人が、か弱い少女を演じた。「任」ではないはずだが、違和感なくずんずん引き込まれた。

トヨコはタカシに淡い想いを寄せていて、亡くなる前、別の幼なじみにタカシへの恋文を託す。しかし、それはタカシの手に渡らず、そのうちトヨコは亡くなってしまう。まことにベタな筋立てである。それなのに、大熊さんの演じるトヨコの儚い面影が、今もたゆたうように脳裡に浮かぶ。演技力のなせる技である。

**高橋 映美子　「夜、ナク、鳥」(カラ/フル)　イシイ 役**

九鬼： 看護婦４人が共謀し、夫達を殺害した、実在の保険金殺人事件をもとにした、大竹野正典戯曲。看護婦の一人、イシイを演じた。首謀者のヨシダを中心に、専門学校の同期の女性達が固い友情で結ばれているように見えて、実はすべてヨシダが仕組んだことだった。イシイは、夫がヨシダに多額の借金があると思い込まされ、次第に追い詰められていく。高橋映美子さんが造形されたヨシダは、心の弱い人ではなく、むしろ気丈で理知的な女性像。男運が悪く、女性同士の友情を信じ切っている。ヨシダの巧妙な嘘が見抜けず、むしろヨシダをいい人と思ってしまう。生真面目ゆえに、夫の借金話を信じ、追い詰められ、次第に心が崩壊していく様を、丁寧に表現された。夫がカレー好きであると、子供とおしゃべりしたことを思い出し、一人語りとして子供との会話を再現した場面が切ない。ヨシダに言われただけでは、殺人まで至らなかったかもしれない。子供との会話を再現している最中に、殺めることを決心した。それが明確に伝わった。

**武田 暁(魚灯)　「そして羽音、ひとつ」(トリコ・A)　女 役**

九鬼： かつてヘルパーをしていた認知症の老女の家に上がり込み、行方知れずになっているその家の娘になりすます女の役。老女の夫は寝たきりで、老女が介護していた。冒頭の場面で、武田暁さんは早口で愛想よく老女に話し続ける。ユーモアが溢れるが、どこかいかがわしい。実は夫のDVに悩み、生活にも困窮し、追い詰められていた。その後、夫が彼女を追って現れ、娘婿のふりをして、夫までその家に住み込む。夫が少し動いただけで咄嗟に頭をかばう、怯えた様子がリアル。

さらに女は、老女の夫の死体を庭に埋めていた。女が訪れた時には、すでに亡くなっていて、死体を放置したままの老女をかばっての死体遺棄行為であった。だが次第に疑いを抱く。老女は、すべてわかっているのではないか？と。老女もまた、若い頃から夫の暴力を受けていた。夫が苦しんだ時、わざと老女は放置したのではないか。その片棒を担ぐよう、自分は老女に操られたのではないか、と。

武田さんは、恐れと不安から、相手によって様々な顔を使い分ける、多様なペルソナを持つ女を繊細に演じた。追い込まれた弱者の心理の変化を、鮮明に描写したのが、お見事。

**藤原 大介(劇団飛び道具)　「そして羽音、ひとつ」(トリコ・A)　男 役**

九鬼： 武田暁さん演じる女に暴力を振るう男。武田さんとのコンビネーションが絶妙。登場場面では、間の抜けた表情で歯を磨く様に、愛嬌すら漂わせるが、急に逆上して女を怯えさせる。だがすぐに反省して優しくする。急に逆上する時は、本当に怖かった。威圧感の表現が卓越していた。

**中迎 由貴子(遊気舎)　「セチュアンの善人」(清流劇場)　シェン・テ、シュイ・タ 役**

太田：ブレヒトの代表作の一つであり、急逝された市川明先生の手になる翻訳である。遊気舎という小劇場に所属する中迎由貴子さんにとって、このブレヒト劇は些か異質であったと思う。中迎さんが扮したシェン・テは娼婦だが、善人を捜して町にやってきた神様に認められ、善人であろうとする。実際、シェン・テは善良な心の持ち主だが、資本主義が幅をきかせる世知辛い現実では、善人は生きていけない。ずる賢く生き残ろうとする、他の住人の食い物にされてしまうのだ。

　そこでシェン・テはやむなく従兄弟のシュイ・タをねつ造する。白いスーツを着こなす冷徹なシュイ・タに変装することで、人生を切り開いてゆく。それは「善人シェン・テ」の存在を守るためでもあった。

　シェン・テ／シュイ・タをいかに演じ分けるか。ここが見せどころである。劇中の他の人物がシェン・テの変装を見破れないという設定だから、相当巧妙に演じる必要がある。さらに言えば、シェン・テがシュイ・タに化けているのか、あるいはシェン・テ役の女優がたまたま二役でシュイ・タに扮しているのか、観客を戸惑わせることができれば合格である。立派に合格点を上回る仕事を中迎さんは見せた。

　大量の台詞を生き生きとこなし、演技をここまでの水準に仕上げるのは並大抵ではない。関西の小劇場の俳優が、こんな風にブレヒトを演じ切ったことを称えたい。

九鬼： 心優しい娼婦・シェン・テに扮した時の清潔さ。冷酷なシュイ・タに変身した時の、クールな身のこなし。最後に、髪を振りほどいてシュイ・タからシェン・テに戻り、神様に向かって切々と語る長台詞からは、善良では生きていけない世の不条理への怒りが伝わり、心に響く。それでも「何もかもこれでいいんです」と無責任に語って去っていく神様の後ろ姿に向かい「助けろ」と叫ぶ時、シェン・テとシュイ・タが統合したかのような、新たな人格が現れたように見えた。心優しく、そして逞しいその姿からは、生気が溢れ、底辺で生きる者への希望となる姿だった。

**松原 由希子（匿名劇壇）　「あたしら葉桜」（iaku）　娘 役**

太田：『あたしら葉桜』（今回は再演）は、まず岸田國士『葉桜』をリーディングし、それに想を得た本編『あたしら葉桜』を続けて上演するという構成である。『葉桜』の娘は慎ましやかで、見合い相手への好意を口に出せない。松原由希子さんはその娘に扮し、白い襟のワンピースで良家の娘らしい空気をまとった。その清潔で静謐な存在感が忘れがたい印象を残した。

本編『あたしら葉桜』では、現代の若い女性となって、キャーキャー大声で叫んで登場する。母が雑誌を被せて、いわゆる「アイネ・キュッヘンシャーベ」（ドイツ語で「ゴキブリ」の意）を捕まえたのだ。『葉桜』の娘とのコントラストが、狙い通りに表現された。

転勤する同性の恋人に付いてドイツに行くべきか。おそらく娘自身の意思は固まっている。だが、母の心情を思いやって逡巡する。うつむき加減の顔の表情だけでなく、身体全体の佇まいから、娘の気持ちがにじみ出る。

２０１７年に本賞の奨励賞を受けて以来、数多くの作品に出演しているが、この役は一つの白眉だろうと思う。台詞だけでなく、身振りや身体性で人物の心情を伝えられるというのは、俳優にとって大きな財産である。また、『葉桜』の娘の清楚さは松原さんの持ち味の一つだが、他のさまざまな役を経験したことで、よりうまくそれを表せるようになったのではないかと思う。

奨励賞

**荷車 ケンシロウ(劇団不労社)　「MUMBLE－モグモグ・モゴモゴ―」（劇団不労社）**

**ケント 役**

九鬼： 共同体に内在する暴力性を描く「集団暴力シリーズ」の集大成的作品。山奥の民宿を舞台にした家族劇で、次男のケントを演じた。ケントは婚約者のミチを伴い帰郷する。民宿の名物は、ジビエ料理。家族の仕留めた鳥獣を食卓に出すことだった。ただ、経営が困難になったことから、皮産業に参入し、野生の猿を乱獲。土地の権力者である狩猟会リーダーの恨みを買い、脅されていた。

冒頭、食卓を囲む一家は、一見楽しげだが、関係性は一触即発。少しのきっかけで言葉の暴力が始まり、肉体の暴力へと発展する。最も冷静に見えていたケントも、暴力性を内在する。元凶は、亡き父の暴力性にあった。

村を出ることを父から許されなかった長男と違い、ケントは高学歴で、都会の大学を卒業し、就職。結婚も決まった。荷車ケンシロウさんは冒頭、知的で優しい人柄を造形。婚約者のミチは、左脳の調子が悪いらしく、突拍子もない言動を繰り返すが、ケントは穏やかにかばってあげている。だが、次第に苛立ちが抑えられなくなる。子供のころから父が長男に暴力を振るっているのを見て育ち、彼自身いじめっ子であったという過去を持つ。一見冷静に見えるが、暴力性を内包していた。その不安を隠しつつ、ところどころで微妙に表出される様を、巧妙に表現された。

大雪で陸の孤島となり、食料が底をついた時、徐々に変貌していく過程も丁寧に表現された。除雪機の中で変死していた猟友会リーダーの死体を、一家で食べる話になった時も、最初は皆を止める。だが最後は、食べてもいいという理屈を、いかにも正しいことを言うように話し始める姿が滑稽。

最初に劇団不労社を観劇した時から、心惹かれる俳優さんだと感じていた。舞台映えする姿と、勢いのある演技。それでいて、微妙な心理描写が丁寧で、明確に伝わる。劇団不労社の世界観になくてはならない演技者である。

奨励賞選考（五十音順）

**鳩川 七海(幻灯劇場)「その犀はひとり行く」(ルドルフ) 文梅・史子（文梅の妹） 役**

太田： 本作は『平家物語』にも登場する、平清盛の五男・平重衡の後半生をモデルとした劇で、2021年に京都で初演、2023年にメニコンシアターAoi（名古屋）で再演された。貴族と宗教勢力が支配してきた小国で、武人の叶家が台頭し、その棟梁が宰相の座に就く。劇冒頭、宰相の息子・昌景は、叶家に敵対する貴族の娘の処刑を命じられる。この女を演じたのが鳩川七海さん。力の限り激しく抵抗し、昌景に毒づいた。これ以上ないほど迫力ある熱演だった。

やがて都にもどった昌景は、宮廷で踊る文梅を見て動揺する。処刑した女と瓜二つだったのだ。鳩川さんが二役でこの文梅に扮した。死んだ女が遺した小さな神像をきっかけに、昌景は文梅と再会する。戦に倦み、平穏を望む昌景を文梅は思いやり、よき理解者となるが、やがて冒頭で殺した女は、文梅の生き別れた妹であったことが判明する。

文梅と妹は容姿が似ていると言うが、演技から受ける印象はまったく対照的である。妹の気性は火のように烈しい。かたや文梅は優しく寛容で、昌景が妹を殺したと知っても見捨てることができない。まったく正反対に思える二人の女性を、一人の俳優が見事に演じたことをここに記しておきたい。

（文中一部敬称略）

**過去の受賞者**

第一回　１９９８（平成１０）年

**男優賞**　森本 研典（１９９Q太陽族、現・劇団太陽族）

**女優賞**　江口 恵美（桃園会）

岸部 孝子（１９９Q太陽族、現・劇団太陽族）

**奨励賞**　森川 万里（桃園会）

**特別賞**　集団演技賞　南河内万歳一座

第二回　１９９９（平成１１）年

**男優賞**　荒谷 清水（南河内万歳一座）

金替 康博（MONO）

南 勝（１９９Q太陽族、現・劇団太陽族）

**女優賞**　増田 記子（MONO）

**奨励賞**　中村 美保（劇団八時半）

第三回　２０００（平成１２）年

**男優賞**　工藤 俊作（１９９Q太陽族）

水沼 健（MONO）

**女優賞**　生田 朗子（リリパットアーミー）

中村 美保（劇団八時半）

**奨励賞**　北村 守（スクエア）

第四回　２００１（平成１３）年

**男優賞**　亀岡 寿行（桃園会）

**女優賞**　内田 淳子

比嘉 世津子（劇団犯罪友の会）

**奨励賞**　武田 暁

田矢 雅美（劇団太陽族）

第五回　２００２（平成１４）年

**男優賞**　 風太郎

**女優賞**　西野 千雅子（MONO）

藤野 節子（桃園会）

**奨励賞**　前田 有香子（劇団太陽族）

**特別賞**　佳梯 かこ

第六回　２００３（平成１５）年

**男優賞**　奥村 泰彦（MONO）

玉置 稔（劇団犯罪友の会）

や乃えいじ（PM／飛ぶ教室）

**女優賞**　内田 淳子

**奨励賞**　岩松 高史（桃園会）

第七回　２００４（平成１６）年

**男優賞**　川本 三吉（劇団犯罪友の会）

紀伊川 淳（桃園会）

菊谷 高広（遊劇体）

**女優賞**　はたもと ようこ（桃園会）

**奨励賞**　原 真（水の会）

第八回　２００５（平成１７）年

**男優賞**　尾方 宣久（MONO）

**女優賞**　加納 亮子（桃園会）

川田 陽子（くじら企画）

武田 操美（鉛乃文檎）

**奨励賞**　河本 久和（空の驛舎）

第九回　２００６（平成１８）年

**男優賞**　奇異 保（兵庫県立ピッコロ劇団）

はしぐち しん（コンブリ団）

**女優賞**　大熊 ねこ（遊劇体）

中田 彩葉（劇団犯罪友の会）

**奨励賞**　山田山 未舟（劇団犯罪友の会）

第十回　２００７（平成１９）年

**男優賞**　二口 大学（演劇ユニット昼ノ月）

**女優賞**　岸部 孝子（劇団太陽族）

条 あけみ（あみゅーず・とらいあんぐる）

**奨励賞**　該当なし

第十一回　２００８（平成２０）年

**男優賞**　 F．ジャパン（劇団衛星）

**女優賞**　亀井 妙子（兵庫県立ピッコロ劇団）

こやま あい（遊劇体）

**奨励賞**　該当なし

第十二回　２００９（平成２１）年

**男優賞**　金城 左岸（劇団犯罪友の会）

原 真（水の会）

**女優賞**　森川 万里（桃園会）

**奨励賞**　該当なし

第十三回　２０１０（平成２２）年

**男優賞**　秋月 雁

村尾 オサム（遊劇体）

**女優賞**　武田 暁（魚灯）

**奨励賞**　該当なし

第十四回　２０１１（平成２３）年

**男優賞**　戎屋 海老

田中 遊

**女優賞**　中田 彩葉（劇団犯罪友の会）

**奨励賞**　該当なし

第十五回　２０１２（平成２４）年

**男優賞**　孫　高宏（兵庫県立ピッコロ劇団）

三浦 隆志（南河内万歳一座）

**女優賞**　今井 佐知子（兵庫県立ピッコロ劇団）

**奨励賞**　寺本 多得子（桃園会）

第十六回　２０１３（平成２５）年

**男優賞**　川本 三吉（犯罪友の会）

**女優賞**　はたもとようこ（桃園会）

**奨励賞**　阪田 愛子（桃園会）

第十七回　２０１４（平成２６）年

**男優賞**　土田 英生（MONO）

　橋本 健司（桃園会）

**女優賞**　平井 久美子（兵庫県立ピッコロ劇団）

**奨励賞**　該当なし

第十八回　２０１５（平成２７）年

**男優賞**　蟷螂 襲 （PM／飛ぶ教室）

三田村 啓示（空の驛舎）

**女優賞** 福井 玲子（PM／飛ぶ教室）

**奨励賞** 浜 志穂 （劇団大阪）

第十九回　２０１６（平成２８）年

**男優賞** 該当なし

**女優賞** 阪本 麻紀 （烏丸ストロークロック）

得田 晃子

野秋 裕香（兵庫県立ピッコロ劇団）

**奨励賞** 上木 椛 （劇団犯罪友の会）

第二十回　２０１７（平成２９）年

**男優賞** 緒方 晋（The Stone Age）

孫 高宏（兵庫県立ピッコロ劇団）

**女優賞** 林 英世

**奨励賞** 松原 由希子（匿名劇壇）

第二十一回　２０１８（平成３０）年

**男優賞** 髙口 真吾

**女優賞** 金子 順子（コズミックシアター）

**奨励賞** 古谷 ちさ（空晴）

第二十二回 ２０１９(令和元)年

**男優賞** 鈴村 貴彦 (南河内万歳一座)

**女優賞** 水谷 有希

森 万紀 (兵庫県立ピッコロ劇団)

**奨励賞** 松原 佑次 (遊劇舞台二月病)

第二十三回 ２０２０(令和２)年

**大　賞** はたもと ようこ (桃園会)

風太郎 (兵庫県立ピッコロ劇団)

**奨励賞** 田渕 詩乃 (兵庫県立ピッコロ劇団)

第二十四回 ２０２１(令和３)年

**大　賞** 梅田 千絵 (関西芸術座)

橋本 浩明

 三坂 賢二郎 (兵庫県立ピッコロ劇団)

**奨励賞** 該当なし

第二十五回 ２０２２(令和４)年

**大　賞** 樫村 千晶 (兵庫県立ピッコロ劇団)

中川 浩三 (Z system)

**奨励賞** 趙 沙良

＊各回とも敬称略、五十音順、（ ）内は受賞時の所属劇団名

編集：片山 加菜